

目的論的、表現的、辨證法的（承前）

高山 岩 男

十二

理論理性による認識の領域に於ては所謂經驗の對象たる『自然』が媒介の原理として必然的且不可缺の契機をなすに對し、カントによれば實踐理性による行爲の領域に於てはかゝる契機は存せず又必要ともせず、實踐理性は單に直接的なる所に本來的な特色を有する。『行爲のあらゆる道德的價値の本質をなすものは、道德律が直接に意志を規定する事である。』（Das Wesentliche alles sittlichen Werths der Handlungen kommt darauf an, dass das moralische Gesetz unmittelbar den Willen bestimme）。理論理性は本性上媒介的のものであつて前節に論じた如く表現的構造を有つものであるが、實踐理性は本性上單に直接的であつて本來媒介的なる表現的構造は道德の世界に存することを許されないのである。表現的なるものは單に直接的なる因果的並びに有機的目的論的なるものより區別された。今や實踐理性による道德的行爲は再び直接的で

ある。併し共に直接的であり乍らこの兩者が全く本質を異にして嚴密に區別さるべきものである事は云ふ迄もない。因果的並びに有機的合目的々なるものはカントの言葉を用ひれば感性的のものであり之に對して^註道德的行爲的のものは超感性的所謂睿智的のものである。道德は即ち超自然的の事柄に外ならない。カントが目的内容的道德を實踐理性より驅逐する所以も此に存するであらう。無論道德の領域にも何等かの意味に於ける事實は存しなければならぬ。カントによれば道德律の存立がかゝる事實である。併しかゝる事實とは、假令經驗に如實に實現せられざるものとは云へ、實は先天的に意識せられ必然的に確實性の明證を伴ふ純粹理性の事實、即ち當爲の體驗そのものに外ならぬのであつて、之は認識の場合に於ける如き客觀的なる事實即ち表現とは異なる。理論理性の自覺は自然なる表現の事實の解釋を媒介して達せられた。實踐理性にはかゝる道は一切原理的に絶たれてゐる。『純粹理性批判』には事實の據り所として自然科学の手引きが存した。『實踐理性批判』には如何なる手引きもない、又如何なる手引きをも求めてはならない。(マールブルク學派の如く自然科学に對應して法律科學を考ふる立場はカントの眞意を全く誤解したものである。)然らば『實踐理性批判』は如何にして成立するのであらうか。

それは『純粹理性批判』に於ける如き理性の自己省察として成立することはできぬ。何となれば實踐理性は表現解釋的構造を有たず、それを超越するからである。カントによれば『實踐理性批判』は、そして又一般に絶對的叡智的なるものを内容とする學即ち形而上學は『要請』(Postulat)として成立するのである。道徳は知の事柄でなく信の事柄に屬する。道徳は表、象、的、認、識、の事柄でなく直接的な決斷的、行、爲、の事柄である。道徳の學は行爲を表象的認識の立場に抽象還元する事を許さぬ。行爲はそのまゝ行爲として保持されねばならぬ。こゝに學は要請となる。カントは知として因果實體的範疇に立脚する對象形而上學を否定し、理性の表現的構造を明かにすると同時にこの立場をも越えて、形而上學をたゞ要請としてのみ許容する立場に立つた。之は何を意味するか。——此に我々は表現的なるものの制限の問題に際會すると共に、哲學の極めて重大なる原理的問題に遭遇する。

註 カントは感性的内容を見て快樂或は幸福と考へた。快樂或は幸福が一般に欲求の満足に伴ふ感情状態で、有機的目的論的構造のものなる事は云ふ迄もないであらう。カント並びに在來一般の倫理學者が多く快樂と幸福とを區別せず、或は快樂や幸福等と名付けられる生命の状況を綿密に區別してそれぞれの本質を明かにする事がなかつたのは甚だ遺憾な事と云はねばならぬ。アリストテレスが既に快樂を三種區別した事は周知の事であらう。快樂幸福の種々なる本質を明かにする事によつて形式主義と快樂主義或は嚴肅説と幸福説の全く誤れる戲論的對立は消滅するのである。後に至つてこの問題に觸れる事があつてであらう。

カントが實踐理性に表現的構造を許さず、寧ろ表現的構造を超越したものとす
 消極的理由は、前節の終りに論じた如く、表現的關係に於ては理性は絶對的完結的普
 遍性に達し得ないと云ふ事態に存する。而も道德理性は本性上絶對的完結的普
 遍性を要求し、この事は道德的行爲に於ける當爲の體驗に直證せられると云ふのがそ
 の積極的理由である。——元來表現は了解せらるゝ限りに於て表現である。自然は
 それが解釋せらるゝ限りに於て表現であり、又表現なる事が知られる。自然には如
 何にしても理性の表現とは解釋し得ず、寧ろ理性がそこに於て自己を客觀化する客
 觀的超越的殘基としての物自體が存せざるを得なかつた。併し自然がかく解釋さ
 れる限り、に於て表現であると云ふ事態は反面より見れば、理性はたゞ自然に表現さ
 るゝ限りに於てのみ認識されると云ふ事態を現す。客觀化せられざる限り理性の
 或は先驗的主觀の實相は永遠に認識されようがない。こゝに表現的なるものの本
 質と同時に限界が存するのである。それ故自然の普遍的法則性即ち理性は常に相
 對的普遍性を有つに過ぎないのであつて、我々が解釋によつて獲得した理性のその
 時々、に於ける普遍性が絶對的なる事を保證する理論の道は永久に又何處にも存し
 ないのである。『純粹理性批判』は相對主義に歸結しなければならぬ。否一般に理

論理性の表象、認識的立場に立つ限り、絶對主義を保證する原理はあり得ず、理論の立場は必然相對主義に止まらざるを得ないのである。理論の立場に於て絶對主義を確保しようとする者は表現的關係を排除して古き獨斷的な實體的關係に逆戻りしなければならぬ。換言すれば先驗的主觀が理論理性として存する限りは表現的構造のものとして、その自覺的認識の普遍性は假令無限に絶對性に近づくものであるにせよ原理上は相對的ならざるを得ないのである。——然るにかゝる無限過程性を超越し、相對的普遍性を飛躍して直接に絶對的普遍性に達するものはカントによれば道德的行爲に外ならない。それが絶對的普遍性なる事を保證するものは實踐理性の直證的事實即ち道德的當爲の體驗である。之が信そのものに外ならぬ。先驗的主觀は實踐理性として初めて表現的關係を撥無し、直接に絶對として自らを現すのである。

道德の本質が當爲による實踐理性の直接性に存する事は何人も疑ふべからざる自明の事柄である。當爲の體驗は一般に生命が然る如く、他より説明し導き出す事の不可能なる根源的な事柄である。かゝる當爲の體驗に發せざる限り如何なる行爲も眞實の意味で道德的とは云へない。當爲と均しく直接的なるにせよ有機的合

目的々なるものが(例へば快樂を求め傳統に流され自己の自主性を忘れて一般に盲從する如き行爲が)未だ道德的と云ひ得ざるはかゝる當爲の體驗を缺くが故である。有機的合目的性は未だ表現的ならざるもの、道德は表現的性格を超越したものである。それは表現的關係の媒介性を越えて再び直接的なるもの、こゝに道德的決斷並びに行爲の根源が存するのである。無論かゝる當爲の體驗が、意識に轉ずるには多く當爲の實現を阻害する障礙が必要であらう。意識が一般に主體客體の對立境位に於て成立する如く、非道德的のものに會して當爲は意識に上り來るのである。併し之は實踐的意識として理論的なる表象的意識とは根本的に異なる。カントに於て當爲とは絶對の主體即ち、先驗的、主觀が直接に自己を限定する所に成立すると考へられるのである。理論理性が特殊に自己を限定して個別となり、かゝる個別の表現を媒介して、無限の過程に於て自己の普遍に還歸するに對し、實踐理性に於ては普遍が端的に自己を特殊に限定する。先驗的主觀の絶對的普遍が特殊的主觀に直接に現れた瞬間、それが當爲に外ならない。理論理性も實踐理性もカントの云ふ如く根源に於ては同一の理性である、即ち先驗的主觀である。兩理性は唯その顯現様式を異にするに過ぎない。前者は表象的認識に、後者は意志的行爲に。——表象的認識の

様式に現れた先驗的主觀即ち理論理性は媒介的な表現的構造を有つものとしてその自己内反省の自覺は無限の過程をなすのである。表現的關係は本性上時間的である。否時間はもと／＼表現的關係に於て或は表現的關係と共に考へられるのである。因果實體的關係も交互規定的目的論的關係も未だ本來的な意味に於ける時間性とは無縁のものである。無論時間の三様態たる過去現在未來が觀想的な表象認識的立場に於て眞實の姿を呈露するか否かは甚だ疑問である。否實は表象認識的立場に於て客體の超越性が失はしめらるゝ如く、この立場よりは過去も未來も單なる記憶や期待となりて總ては現在となつて了ふのである。過去と未來に對立せぬ現在是最早や現在とは云ひ得ず、觀想的な表象認識的立場で、現在は無論の事時間そのものが眞實の姿を顯す筈はない。現在も一般には時間も生命の實踐的様態に於て成立するのであつて、時間_は生命の表現的構造に即して初めて考へられる。前に述べた如くかゝる生命の表現的構造を認識的立場に映したものが所謂解釋學的立場であつて、この立場はそれ故既に過去の性格をもつものと云へよう。『純粹理性批判』はかゝる性格をもつ實驗的解釋學であつた。理論理性はかゝる性格に於て時間的である。之その自覺が無限の過程をなし、その普遍性が非完結的相對的普遍性

なる所以である。表象認識的立場に於ける時間的立場は必ず相對主義である。かゝる立場より絶對主義を標榜しようとするならば初めより表現的構造の時間性を棄て、非時間的の立場即ち因果實體的或は目的論的立場に逆戻りするより外はない。かゝる立場で如何に時間を説くにせよ、その時間は未だ眞實の時間ではない。時間^は表現的立場に於て初めて眞實の時間として現れる。と同時に認識的な解釋學的立場は又その當然の歸結として時間的過程性を逃れることができない。理論性は本來的に時間的である。——然るにかゝる時間的な表現的構造を超越して、而も直接的なるものはカントによれば道德的行爲に外ならなかつた。實踐性は超時間的である。換言すれば道德は『客觀的精神』でなく『絶對精神』である。

道德はカントによれば歴史的發展を超越する。道德の具體的内容態には歴史的發展を容れる餘地があるにせよ、道德そのものには原理上歴史的發展がある可き筈はない。歴史的發展は超歴史的道德の中に於て可能且現實である。理論性はそれ自體に於て歴史的發展的な相對性を本來的な在り方とするに對し實踐性は本來的に歴史的發展的な相對性を直接に超越して絶對的である。かゝる實踐理性の絶對性を保證するものは即ち當爲の體驗に基く道德的行爲に外ならない。道德

的當爲とはカントに於て先驗的主觀の絶對的普遍が直接的無媒介的に特殊の意志を限定することを意味する。當爲の直證が道德をして客觀的精神でなく絶對精神なることを保證せしめるものである。それは時間性を——解釋學の立場より觀られた時間性でなく本來的な時間性を超越した永遠の現在と云ふべきであらう。こゝに均しく直接的で何等かの意味で時間を離れ乍らも『目的論的』なるものが單に非時間的であるに對し『超表現的』なる道德が超時間的であるの相違が存するのである。——併し乍らかゝる實踐による超表現的超時間的の絶對的普遍が換言すれば『先驗的主觀』の實踐の様式に在る『絶對精神』の如きものが理論たる學の内容に成る事は如何にして可能であるか。即ち實踐理性の學或ひは『實踐理性批判』は如何にして可能であるか。理論理性は本來時間的表現的のものとしてその實驗的解釋學たる『純粹理性批判』が相對主義的なるは當然であり又その本性である。しかし『實踐理性批判』はかゝるものであることは斷じて許されない。而もそれは何等かの意味で理論たる學でなければならぬ。その理論や學は解釋學の如く凡てを認識の立場に還元し映し出すものであつてはならない。何となればかくするとき、行爲の絶對的性格はそのまゝに保存されることなく、認識に映し出された行爲となり、その絶

對性は當然失はれて相對的のものに轉じてしまふであらうから。表象的認識に於ては唯心論の命題の示すがまゝに客體の超越性は見失はれて凡て内在化される如く、解釋的認識に於ては行爲の絶對性は失はれて、絶對的のものは凡て相對的にならざるを得ない。絶對を絶對として保持する立場は實踐であつて認識ではない。認識に於ては——それが實體的範疇による虚構に基くものでなき限り——如何なるものと雖も斷じて絶對的ではない。無論こゝに云ふ行爲も實踐もたゞ道德的のものに限る。かゝる道德的行爲の絶對性をそのまゝに、何等認識の立場に還元せずして保持しつゝ學の内容たらしめる唯一可能の途はカントによれば要請の途に外ならぬのである。——

例へばカントの倫理學に於て道德律の實在根據であり道德律がその認識根據であると稱せられる自由をとつて考へて見よ。自由は果して我々が知的認識の立場に終始する限り保證し得るであらうか。因果の範疇或ひは實體の範疇或ひは目的論の範疇に立つ——在來の多くの倫理學が誤つて立つた如く——認識の立場より如何にして自由が立證し得るか。かゝる範疇に立つ認識の立場より(それはかゝる範疇と同一秩序に立つてかゝる範疇を例へば因果律の如きを否定するにせよ事情

は全く同じである。自由は原理的に立證する事が不可能である。この事は自由に關する永き哲學の論究の歴史が證明して餘りあるであらう。而も自由は道德行爲に於いては疑ふべからざる現在の事實である。我々が當爲を體驗し義務を感じ責任の念にからるゝときは即ち自由である。自由とは當爲を體驗し義務を感じ責任の念にからるゝ事その事に外ならない。云ふまでもなく自由の意識は我々の自由が束縛され我々が惡を爲すときに強烈であらう。手足なくして却つて自己の自由を痛感する如く、眞の自由人に自由の意識はないであらう。自由は兎に角現在の疑ふべからざる事實であつて、若し之を疑ひ否定する者あるとするならば我々はその人に向つて、汝は未だ道德的行爲をなしたることなき故自由ならぬのであつて、自由ならむとすれば道德的行爲をなして見よと云ふより外ないであらう。——かゝる自由を自由として學の内容とするには要請として立つるより外はない。行爲によつて實證せらるゝものを觀照的認識に還元せずしてそのまゝに保存する唯一の途が要請なる事はこゝより明かであらう。

道德の問題に於て最も重大な問題であり又躓の石であつた自由が、以上の如き道德の自由より區別して行爲の自由としても省らるべく、又カントに於て種々考察さ

るべき問題を殘してゐることは云ふまでもないが、かゝることは今の私の問題ではない。現在の問題は實踐的なるものをそのまゝ學の内容として保存することが如何にして可能なるかの問題である。カントがかゝる可能の唯一の道として提出したものが、要請の道であつた。カントの道德形而上學が種々採る可からざる不純のものをも有することは明かであるが、この要請の思想はカント哲學に於ける不朽の達見に屬する。無論この要請は道德的行爲に基くもの故道德的行爲なき人には永遠に納得出來兼ねるものであらう。かゝる人にとつて要請は高々要求に過ぎず、或は假定の如きものに過ぎない。即ち何等實在性なき可能性に過ぎない。要請は純粹の理論ではない、純粹なる認識の立場に於て考へられるものではない。要請は實踐理性としての先驗的主觀が理論理性に直接的に現れたものに外ならぬ。先驗的主觀は何等の意味でも對象存在でなき故要請も對象認識の立場よりは思惟すべからざるものである。併し何等の形でも認識とならざるものは學の内容となり得ず、而も表現的構造を越ゆるものが學的認識となるにはこの要請の途以外に如何なる途もあり得ないのである。絶對なる先驗的主觀が學の内容たり得る道はたゞ要請の道のみである。『實踐理性批判』が或は眞實の意味での道德形而上學が學として成

立する方法が解釋學的方法と異なる要請的方法である事は明かであらう。そして又こゝよりカントの道德律なるものが解釋學的方法によりて達せらるゝ法則と、換言すれば『純粹理性批判』に於て達せられた自然法則と全く構造と意義を異にすべき所以も了解できるであらう。道德律は先づ客觀的法則でなく、次に相對的法則でない。然るに元來客觀的でなく相對的でなき法則の如きものは實際にはあり得ず、かゝるものは實は法則でない。如何なる法則も客觀的『意味』として成立するものであり、之は絶對的であり得ず必ず相對的である。それ故主觀的にして絶對的なる道德律は法則でなく寧ろたゞそれとのアナロジーに於て考へられる生きた法則性、とでも云はるべきであらう。法則道德はたゞかゝる生きた法則性を説くに止まるべきであつて、その限り形式主義の誤謬を脱することができる。然らずして限定的な法則を説く限り抽象的な形式主義の誤謬は原理上逃れ得ないのである。そしてこの事は現實の道德の事態が相對的歴史的事實と道德的天才が人を見て法を説くに止まり何等一般的法則を立つることがなかつたと云ふ事態よりも推察できるであらうと思ふ。――

知の支配の權限を決定して信に優越な地位を與へようとしたカントの理論理性

に對する實踐、理性の優位の思想が以上述べた如き『要請』の考へに至つて頂點に達し、こゝにカント本來の面目が最も明かに發揮せられることは、私の信じて疑ひ得ない所である。カント哲學不朽の功業は理論理性の表現的構造を發見し、實踐理性の形而上學が要請としてのみ成立する事を道破した所に存する。實踐理性の優位の思想の必然的に歸結するものは要請として、の形而上學の理念である。カントに至つて主觀は眞實に主觀として把へられてその表現的構造が自覺され、『物自體』の意義が古き因果的實體的範疇より解放されて正當に保持さるゝと同時にかゝる解釋學的認識の立場の相對主義も明かにされ、こゝより實踐的道德の優位が燦然と闡明さるゝと共に絶對の學はたゞ要請としてのみ成立する事が明かにせられたのである。この要請としての形而上學は現在の我々に何を教へるであらうか。カントは形而上學を眞實には唯道德の領域にしか認めなかつた。之れ理論としての形而上學を否定しようとする彼の意圖より當然であり、此に今も猶否むべからざる不朽の意義が存するのであるが、形而上學が道德以外にも種々の領域に互つて成立する事は形而上學の要求並びに歴史より見て否定出來ない所である。將來學として現れる形而上學が如何なるものたるべきか、この綿密に省察さるべき問題は今こゝでは

棄て去るとするも、所謂『絕對』と表現せらるゝもの特にはヘーゲル風に『絕對精神』と云はるゝものの哲學が形而上學として現在の我々に大きな課題たるは明かであらう。今カントの精神に立脚するならば、如何なる風の形而上學と雖も絶對の學たる限りは要請の形而上學でなければならぬ。この理念は古き對象形而上學よりは及びも付かぬ新しき理念であつて、實體的並びに目的論的範疇に立つ形而上學は元々觀想的理論に出發してこゝに歸結する故、要請の理念には全く無縁である。要請としての形而上學は表現的範疇に立つ哲學にして初めて考へられる。表現的範疇に終始する限り相對主義は到底逃るゝ事ができない。カントの『自然』認識の立場を出で、『精神界』の構成を理解せんとする立場に至つてはこの事が尙一層明かであらう。所謂歴史主義がこの立場の歸結と考へられる。この立場が實際は『客觀的精神』の解釋學的な『生の哲學』である。元來表現的構造なるものは歴史的的生命に就て明かにせられたもので、『自然』を對境とする理論理性の如きものに就ては問題とすらならなかつたのである。然るにかく普通には表現と考へられざる自然が既に理論理性の表現的構造によつて成立する事を早く明かにした者がカントに外ならなかつたのである。こゝで假令表現的關係によつてにせよ或は如何なる關係によつ

てにせよ既に構成せられたものは本來の意味に於て自然である筈はなき故一體自然とは何であるかの最も古き而も最も根本的な疑問が生ずるであらう。この長年の間理性によつて構成されたり人間によつて征服されたりした如く考へられて不當の取扱を受けて來た自然とは本來如何なるものか。こゝに所謂『物自體』の問題は根源的な自然の問題として再び新たな解決を要求し來るであらう。我々はこゝに自然哲學が在來の姿とは全く異りたるものとして現れ來る事を拒否する事ができない。初めより自然の眞の姿を見失つてゐる近代哲學が客觀的精神或は客觀的生命的の解釋學に於て何等深き意味に於て自然を問題とすることなく單に精神の歴史主義に陥らうとするのも蓋しこゝより考へるときは當然の事であらう。かゝる歴史主義を純粹に理論の立場より超克しようとする事は前に述べた所より推察できらる如く實は如何なる巨人的才幹を以てするも永遠に不可能な事柄なのである。歴史主義の理論的克服は原理上不可能である。それを成就したと思ふ者は知らず識らず表現的範疇を棄て、古き實體的か目的論的かの立場に復歸したものである。『絕對精神』の形而上學は理論としては不可能である。理論としての『絕對精神』の形而上學も實は一つの精神科學として『客觀的精神』の一形態に過ぎない。即ち絶

對の學も理論たる限り歴史的相對性は逃れることができない。原理上歴史的相對的なるものを超歴史的絕對的のものと主張する事は云ふ迄もなく理論理性の僭越な要求に誤られた空しき獨斷的主張に過ぎぬ。我々はかゝる實例の最も典型的なるものを有つ。ヘーゲル哲學が即ち之である。彼が『精神現象學』に於て精神の表現的辨證法的な構造を如實に知り乍ら『絕對精神』の哲學と歴史哲學に至り、目的論的範疇に墮したのはこの事情を裏書きするものに外ならない。歴史主義を超克するものは最早や理論でなく、何等かの意味に於ける實踐である。その場合學が成立するならその學は何等かの意味に於て、要請としての學でなければならぬ。『絕對精神』の形而上學は要請としてのみ可能である。現代の『生の哲學』もかゝる實踐と要請にまで突き進まなければ眞實の意味に於て『生の形而上學』に達する事は不可能である。否かゝる實踐と要請なき生命は元々眞實の生命ではない。『生の哲學』はもともとその要求としては觀想的な認識的態度と實踐的な情意的行動の統一たる現實の具體的生活を目指し、そのため過去の存在、理性、精神、自然、物質等の抽象的概念に代へて『生命』なる表現を置き乍ら、表現的關係の徹底的な自覺に達せざる所より眞の生命なき生の哲學に終つてゐるのである。『生の哲學』が解釋學的立場に留る

のも之に基くからであり、解釋學的立場に留る限り又この境位を超克することも難しいであらう。歴史的意識によつて却て歴史主義を克服し、相對的意識によつて却て相對主義を超克しようとするデイルタイの優れた意圖もこの實踐と要請の境地に進まざる限り實現は永遠に不可能である。——こゝにカントの要請の思想が再び新な意義をもつて我々に逼り來るのである。

併し乍ら、カント的、的要請は果して解釋學的な相對主義と歴史主義を逃れる唯一の可能形態であらうか。無論要請の如き理論に行くことなく、一切の表現と解釋を放下して只管禪定打座の實踐に絶對を體現し或は正義の實現に小我を空じて宇宙の理に生きることも相對的な理論の立場を逃れる一つの道ではあらう。併し之は少くとも哲學の否定を意味する。哲學は何等かの意味で學でなければならぬ。併し又カント的要請は絶對の學の唯一の道であるか。カントに於て道徳は何等の形でも『客觀的精神』たるものではなく直ちに『絶對精神』たるものであつた。彼に於て『絶對精神』は『客觀的精神』を媒介し包むものでなく單に『客觀的精神』を棄却したものに過ぎなかつた。カント哲學は客觀的精神を缺く。彼に於て存するものは解釋學的立場の、換言すれば理論理性の認識に投影された表現的關係と、それを超克する

直接的なる超表現的關係とに過ぎない。具體的な現實、生活の表現的關係は彼に於て見失はれてゐる。要請とは實はかゝる解釋學的立場より歸結する相對的立場超克の道に外ならなかつたのである。解釋學的立場は未だ分別的立場である。要請の思想も未だかゝる分別的色調を逃れるものではない。要請の理念は抽象的である。然らば具體的な現實生活の表現的關係とは何を云ふのであるか。それは現實の行爲の關係即ち廣き意味に於ける道德を云ふに外ならない。カントに超表現的道德は存したが表現的道德界はなかつた。この表現的道德界こそ具體的な道德的實在界として所謂客觀的精神に外ならぬのである。こゝに至つて分別的立場は自ら超越せられ行くであらう。即ち『辨證法的なるもの』が漸次こゝに顯となる。要請の思想もこゝに至つて轉身せざるを得ないであらう。『客觀的精神』の構造——我々は之を先づ道德そのものの表現的構造より明かにしなければならぬ。

十三

カントは『純粹理性批判』に於て理性の解釋學的立場を發見し、理性の表現的構造を發見した。そして『實踐理性批判』に至つて直ちに解釋學的立場を超越し、理性の表現的構造を止揚しようとした。併し乍らカントに於てそれは果して棄却ならぬ

超越であり否定ならぬ止揚であつたであらうか。換言すれば實踐理性はカントの考へた如く何等の意味でも表現的構造をもたぬものであらうか。否、實踐理性こそ最も優越な又如實な表現的構造のものに外ならないのである。最も本來的な又最も根源的な表現的關係の世界こそ道德の世界に外ならない。人格と行爲の關係が即ちこれである。人格と行爲の實踐的關係を離れて何處に本來的な道德があり又具體的な表現的關係があり得ようか。前に述べた如く表現的關係とはそれ自體に於て觀想的實踐的なる自覺の生命の構造であつて、觀想と實踐の特有なる統一聯關をなすもの、かゝる根源的な生命の如實の實在的聯關をばそれ自體に於て觀想的な態度即ち認識的立場に還元する所に體驗表現了解の解釋學的立場が成立するに過ぎないのである。實在の生命は即ち常にそれ自體に於て了解的行爲的である。自然科學と精神科學は一應區別さるゝにせよ、カントが理論哲學に於て立つた立場はかゝる實驗的な解釋學的立場に外ならなかつた。併し今云ふた如くそれ自體に於て生命の觀想的態度に立脚する理論的認識的な解釋學の基底地盤にはそれ自體に於て觀想的實踐的なる現實の具體的の生命が存する。この生命こそ眞實に表現的な構造をもつ生命に外ならない。この生命が廣く實踐的なる人格的行爲の世界即

ち道德である。道德は生命の全體に亙り又客觀的生活形態の基礎地盤をなす眞實の生命の本源的な根本構造である。道德的ならぬ生命はない。又道德に基かぬ生活形態はない。道德的ならぬ又道德に基かぬ生活とは恰も行爲なき生命と同じく全くの矛盾であり偽である。無論道德も一つの客觀的生活形態として見るときは學問藝術法律宗教等と相並ぶものではあらう。併し學問の下にも藝術の下にも道德があり、法律宗教等の下にも道德がある。即ち學問藝術法律宗教等はそれ自體に於て本源的に道德的なる生命の客觀的表現形態なのであつて、道德が生命の根本様式として之等の表現形態の基底的地盤をなすものに外ならない。こゝが眞實の表現的構造の世界である。云ふ迄もなく行爲に基かぬ反省があり得ないと同じく反省の媒介なき行爲の如きものはない。生命は常に了解的行爲的である、觀想的實踐的である。かゝる行爲實踐の世界即ち道德界こそ最も優越に表現的範疇の支配する所であり、この意味に於て實踐理性こそ眞實に表現的構造のものと云はなければならぬ。

カントの『實踐理性批判』は『純粹理性批判』に於ける理性の解釋學的な表現的構造より歸結する相對主義的立場を逃るゝため、眞實の表現的關係界なる人格的行爲の

具體的形態を容れずして直ちに直接的なる絶對的普遍の當爲的限定に進んだ。ここにカント倫理の致命的缺陷が存する。カント倫理には、人格と行爲の表現的媒介的契機がない。之れカントが本來的に社會的であり又同時に眞の意味で歴史的なる人格的道德の立場より出發せず、歴史社會等の意義を少しも明かになし得なかつた根本の理由である。所謂形式主義の非難も之に基く。カントの形式主義の誤謬は普通誤つて考へられる如く、彼が法則道德を説いた所に存するのではない。道德律が生きた法則性として道德の本性をなす事は前に論じた如くである。如何なる道德も道德なる限りかゝる意味の法則性は有たなければならぬ。生きた法則性は道德の *conditio sine qua non* である。だが併しそれはたゞ必要なる條件に過ぎない。道德は常に充分なる條件をもちて現實に成立する。この充分なる條件とは人格と行爲の表現的關係に外ならぬのである。カントの形式主義の根本誤謬は法則性になく、内實的な人格と行爲の表現的關係を缺く所に存するのである。そしてこの必要條件と充分條件が在來の形式内容の範疇に立つ外面的關係でなき事は斷るまでもあるまい。兩者は表現的關係に立つのである。この内實的な表現的關係を排する所にカントの道德は『客觀的精神』を止揚せぬ空虚な『絶對精神』となり、相對を超

越せぬ絶對となり、媒介を含まぬ直接性となつた。かゝるものが『絶對精神』でなく眞の『絶對』に非ざるは云ふまでもない。相對を排し相對に對立する絶對は實は絶對でなく相對である。道德的當爲はカントに於て絶對の否定性でなく特殊限定の抽象的一般性に過ぎなかつた。カント倫理の含む諸々の難點は凡てかゝる意味の形式主義に發する。カントの『實踐理性批判』は表現的關係を單に棄却するものであつて未だ超越するものではなかつたのである。

我々はカントの要請の理念より要請の事實的根據たる絶對的完結的普遍性が隨所に體驗として存することを教はる。當爲の體驗が之れである。この當爲の體驗の客觀的表現が即ち行爲に外ならない。道德に於ける當爲と行爲は表現的關係に立つもの、即ち當爲は本來的に表現的構造のものに外ならないのである。この場合當爲の體驗そのものは客體的對象存在でなく先驗的主觀そのものであらう。かゝる先驗的主觀が人格である。この人格的主觀が自己を客觀化する事、之が實は當爲の體驗の本質であり、その内面的要求であり、その内面的發展である。かゝる當爲の行爲への表現が道德の缺くべからざる要素であつて、之が道德の充分なる條件を満すもの、之なくして道德は未だ眞實に道德と云ふことができない。換言すれば當爲

の體驗が道德の基礎的な必要條件をなしその行爲への表現が充分條件をなすのである。何れを缺いても道德は未だ完全と云ふ事ができぬ。行爲への表現を含まぬ當爲の如きものはあり得ず、恰も知りて行はざるものは知に非ざる如く、行爲への表現を含まぬ當爲の如きは實は當爲ではない。少くとも絶對的普遍の主體的限定としての道德的當爲ではない。かゝる當爲は常に客觀的表現の要求を含む。同様に當爲の表現ならざる行爲は未だ道德的行爲とは云ひ得ないであらう。道德に於てはそれ故行爲が常に當爲に基くと云ふ關係、即ち表現的關係がその本質的構造をなすのでなければならぬ。こゝより我々は表現的關係が道德に本來的な役割を演ずる事を具體的に知り得るであらう。形式道德は單に偶然的な事柄として、なく本來的必然的な事柄としてこの表現的關係を攝取する所に、或は寧ろかゝる表現的關係に發展する事によつて初めて眞實の十全なる道德となる。之なくしては未だ道德ではない。在來動機説や結果説と稱せられて未だ因果的範疇を脱せぬ動機や結果等の事態を見誤りたる見解は、當爲と行爲の表現的關係として正當なる見解に訂正されなければならぬ。

かゝる絶對的普遍の直接的な主體的限定としての道德的當爲の體驗がその内面

的要求として或は内面的發展として行爲へ自らを表現するとしても、それは未だ何等の客觀的媒介を経ぬ直接的的發展なる故、單なる止むに止まれぬ要求とその實現として存するより外ないであらう。併し乍らかゝる止むに止まれぬと云ふ如き全く直接的な全く無媒介の要求に基く行爲は眞實の道德的行爲であらうか。我々の實際の道德の事態はかゝる直接的無媒介の事態であらうか。前に述べた如く意識は主體と客體の對立的境位に於ける主體の自己否定性に成立する。自覺とはかゝる境位に於ける主體の意識である。今若し道德が全く直接的無媒介の事態とするならばそこに意識や自覺の存せぬ事は明かである。併し無意識な或は無自覺な事態に成立する行爲は果して道德的行爲であらうか。我々の實際の道德の事態はかゝる無意識の或は無自覺の事態であらうか。決してさうではない。道德こそ最も媒介的のものであり最も自覺的のものである。無意識の行爲は決して道德的行爲ではない。或は道德が何等かの意味で無意識の如き状態にも成立するとするならば、それは實は無意識でなく超意識の事柄でなければならぬ。併し私は今直接なる當爲の體驗とその行爲への表現を以て十全なる道德の事態とした。この事態と道德の自覺性や媒介性の事態とは明かに矛盾する。之の矛盾は如何に解決さる

べきであらうか。

ヘーゲルが『精神現象學』の『道德的世界觀』の章に於てカント倫理に對し痛酷な批評を加へ、近くはジューメルがその『カント』に於て均しく同一論調の非難を形式主義に對して加へた如く、單に道德の一本質たる直接性のみを強調してこゝより道德の本質全體を規定しようとする立場が實は道德そのものの否認に導く危険をば内在する事は明かである。カント倫理が内實的な行爲の表現的關係を含まず、その限り客觀的行爲の道德でなく當爲的體驗の道德なることは前に述べた如くである。こゝに形式主義の誤謬が存した。形式主義を徹底するとき實は道德の究極的價値を當爲の人格的體驗に基けようとするカントの意に反して、人格の價値批判でなく、外的動作の價値批判に轉化する危険に陥るのである。然るに道德に於ては行爲は人格の表現であり當爲の客觀化であつて、行爲の批判はその主體たる人格の批判でなければならぬのである。然らば今論じた如く道德に實質的な人格行爲の表現的關係を容れ、その意味で必要且充分な兩條件を満すことによつて果してヘーゲル・ジューメルの形式主義の非難は逃れ得るであらうか。我々は明瞭に否と答へなければならぬ。如何に人格行爲の表現的關係を容れるにせよ、單に絶對的普遍の直接限定

たる當爲の表現たる限り未だ眞實の自覺を媒介せぬ行爲に止つて、かゝる行爲は單なる獨我的主觀態に止り何等客觀的普遍性を有たぬと云ふ非難は毫も逃れる事ができない。かゝる全くの直接無媒介の行爲は實は利己的行爲に陥るのである。この非難は先に論じた道德の自覺性と直接性の矛盾と共に如何にして逃れ得るのであるか。

こゝに初めて我々の問題は『客觀的、精神』の問題に進む。上述の矛盾と非難を逃れようとする限り我々の思索は當爲道德の社會性と歴史性の考察に或ひは一般に道德の個人性と社會性、歴史性と超歴史性の考察に入らなければならぬ。我々の生活は本來的に社會的であり又次に歴史的であつて、道德も當然本來的に社會的且歴史なのである。上述の矛盾と非難は凡てかゝる道德の歴史性と社會性を抽象する立場より出づる所の形式主義に對する矛盾と非難に外ならぬのであつて、形式主義の根本誤謬はこの道德並びに生命の非社會性と非歴史性に存するのである。如何なる道德的生活と雖も社會的歴史のならざるはない。之が現實の生活である。本來的な社會性と歴史性を抽離する立場は凡て形式主義の誤謬に陥るものと云はねばならぬ。と同時に社會と歴史の下にも常に道德が存する。前に述べた如く道

徳は生活の全體に互り又凡ゆる生活形態の基底たる根源的な眞實の生活様式なのである。こゝに我々の問題が甚だ複雑したものである事に氣がつくであらう。こゝに『客觀的精神』と云はゞ『絶對精神』の如きものの『主觀的精神』に於ける交錯が存するのである。併し前に述べた如くかゝる眞實の具體的根源的生命に本來の表現的關係が存する。錯綜した之等の問題を解く鍵も先づこの表現的關係に求められなければならぬ。然らばこの解決の鍵とは如何なるものか。私の考ふる所によれば先づ第一には我々の生活の最も根源的な道德的基底としての人格、共同社、會、或はカントの所謂『目的の王國』と、第二には之に基く客觀的精神としての社、會、歴史と、第三にはその客觀的表現形態たる觀念、形態の三つのもの及びその表現的且辨證法的なる聯關がそれであつて、觀念、形態は社會歴史的生活の客觀的表現であり従つてこゝには理論的な表現的關係が支配し、従つて又客觀的なロゴスが存立し、次に社會歴史的生活はより根源的には『目的の王國』に基き兩者の間には實踐的な表現的辨證法的關係が支配するのである。『目的の王國』は唯絶對否定性として現實の社會歴史的生活に即してのみ存する。それは表現としての自然が先より問題として残り來つた物自體としての根源的な自然を表現的根據として有し而も實は

かゝる根源的自然がたゞ表現的自然に即する絶對否定性としてのみ存するの事情が同じである。根源的な意味に於て社會とはかゝる根源的自然に於ける根源的自然を媒介とする人格と人格の共同社會即ち『目的の王國』である。現實の歴史及び歴史の社會は之を表現的辨證法的な基礎とする。こゝが眞の道德的生活の世界である。所謂客觀的精神とは絶對否定たる『目的の王國』の辨證法的基礎に成立する社會歴史的生活に外ならぬ。そして學問藝術法制等の生活表現形態はこの本來的な道德性を生活基礎とする種々なる様式の社會歴史的生活の觀念的表現形態に外ならないのである。――

私はこれ等の問題に立ち入つて表現的並びに辨證法的の根本構造を明かにするに先つて前より残り來つた當爲の直接性と自覺性の問題を以上の暫定的な思想に即して解決して置かなければならぬ。

直接的な當爲に基く我々の道德的行爲は全く個人的人格の事柄に屬する。何人にも非ざる人間がなき如く何人の行爲でもなき行爲はない。この意味で絶對的普遍は個人的人格の事柄と云ふべきであらう。併し乍ら之は道德的行爲の本源的なる社會性を排するものではない。否寧ろ社會こそ道德の成立並びに實現の場所に

外ならないのであつて、道德は本來社會的であり、又社會的たるべきものである。人格はもとゞ社會的である。人格共同社會の道德ならぬ道德は實は未だ道德ではない。併し又我々は個人的人格として社會に對立することが可能である。この可能性がなければ、人格の世界に於ける主體と客體の對立はあり得ないであらう。意識と自覺はかゝる對立に初めて成立する事柄であつた。道德的自覺はかゝる人格と社會の對立的媒介に成り立つものでなければならぬ。この對立と自覺の可能に、換言すれば、精神の自己否定性の可能に先づ人格の消極的な意味に於ける自由がある。道德的當爲の直接性は實はかゝる對立媒介の止揚による直接性である。それは何等の媒介なき單なる直接性ではない、かゝる直接性は現實生活の何處にもない。道德に於ける眞實の直接性は自覺の媒介を越えた直接性でなければならぬ。かゝる直接性の行爲への實現、換言すれば、人格共同社會の實現の行爲こそ眞の人格的自由であり、眞實の道德的なるもの即ち善である。こゝに於て個人的人格の行爲は直ちに共同社會的なる行爲である。併し對立と自覺可能の換言すれば、自己否定可能の消極的自由に社會からの個人の遊離の可能性があり、こゝに反道德的なるもの即ち惡の可能が潜む。

かゝる人格共同社會の實現、換言すれば自然を共通の行爲的媒介地盤とする對人交渉界へのこの人格共同社會の實現に歴史的社會が成立する。この自然との共通的交渉は主として人間の自己と種族の保存並びに欲望満足の有機的生活を内容とするものであつて、この共同的聯關が社會の意義を構成する。かゝる歴史的社會の道德的或は人格的結合をなさしむるものが今述べた人格共同社會に外ならぬのであつて、之が常にその道德的人格的地盤をなす。併しこの人格共同社會は全體的にはたゞ歴史的社會に即してその絶對否定的根據として存するのみであつて何處にも自己の獨立的存在性を有つものではない。かゝる歴史的社會に於て自然が初めて表現の意味をもつに至る。社會に於ける自然は皆表現的自然に過ぎない。この意味に於て自然は常に表現による觀念性をもつ。即ち固定的意味をば有つ。かゝる自然の表現的根據たる根源的の自然は又人格共同社會と同じく表現的自然に即してその絶對否定性として存するのみである。かゝる根源的自然と人格共同社會に基づく現實の社會にして初めて本來の意味に於ける歴史をもつのであつて、それは自然と人格の交渉たる根源的な自然的人格的共同生活の表現たる意味を荷ひこの表現的性格に基づく觀念的紐帶によつて現實の歴史的社會が成立してゐるのである。

歴史はかゝる社會の歴史に外ならない。この觀念的紐帶は前に述べた如く自己の獨立的存在性と獨自な法則性とをもつ。かゝる觀念的紐帶に基く社會は常にその自己の存立性と法則性によつて人格的共同社會の地盤を遊離する傾向をもつ。これが歴史的社會の有する逃るべからざる運命なのである。人類の歴史はかゝる生命の運命に成立する。或はかゝる運命をもつのが我々の生命なのである。こゝに於て道德は人格的共同社會實現の行爲に存するのであつて、運命に忍受しつゝ常に現在を超克してかゝる社會の生活を實現するもの即ち眞の人格的生命が道德に外ならぬ。未來に自己を充實し行く生命に究極的な道德の根源がある。そして對立と自覺の即ち自己否定の可能の自由に基く之よりの背反が不道德となる。一切の惡はかゝる消極的自由に成立するのである。惡の内容は人格共同社會よりの背反に外ならない。この消極的自由に個人的人格の行爲にして共同的社會性の意義を有たぬものが可能となる。かゝる人格的共同社會と現實社會の葛藤に歴史が成立するものに外ならぬ。それ自體に永遠的な存立性とロゴスの普遍的な法則性を要求する觀念的表現形態はこの歴史的社會の生活の非實在的なる客觀的表現であつて之の永遠的存在性と普遍的な法則性に非實在的即ち觀念的であり乍ら我々の生活

を超越する超越性がある。併し歴史がその轉換期に進みて人格的共同社會の地盤が喪失するとき生活は有機的に墮し觀念形態は生活の地盤より遊離し既に過去の觀念形態と未來の人格共同社會を志向する新しき觀念形態との對立となる。世界觀の葛藤なるものは人格共同社會に基く歴史の社會に於てその人格的個性並びにその類型的共同性に基いて成立するのである。

『客觀的精神』とヘーゲルによつて名付けられたものはかゝる歴史の社會とその觀念的表現態の表現的辨證法的なる聯關を云ふべきものであつて、その根本特徴を形作るものは歴史性である。客觀的精神はその本性に於て常に過去の性格をもつ。こゝに絶對的な人格共同社會に於ける根源的生命よりの客觀的精神の分離が生ずる。歴史の未來を導き行くものは客觀的精神でなくかゝる絶對精神である。之が客觀的精神を離れて獨自な存在をもたぬ事は云ふまでもなくたゞ客觀的精神に即してそれを超越するものであることは前にのべた如くである。かゝる超越が即ち絶對否定に外ならぬ。この絶對否定にして初めて眞實の意味に於ける超表現的なものが現實となる。カントの道德的當爲は單なる直接的規定でなく具體的には以上の如き意味に於ける客觀的精神に即する絶對否定としてのみ現實的たり得る

のである。こゝに直接性と自覺性の矛盾が消え形式主義の非難が免れ得る。そして同時にこゝよりカントの『目的の王國』がカントの説ける如き抽象的のものとは異りて實際には如上の意義と實在性をもたなければならぬことも明かであらう。

道德の表現的構造を超越する所以はたゞ以上の如き客觀的精神の媒介を止揚する絶對否定性にのみ考ふべきであつて、こゝに道德の眞實態が存するのである。かゝる意味に於てのみカントの當爲道德説は深き意義をもつ。然るにカントの形式主義を超克せんがため道德に内實的なる表現的關係を容れて *Moralität* より *Stichheit* を説くに至つたヘーゲルは、道德をばたゞ客觀的精神に盡きしめることによつて却つて道德の眞實態に達し得なかつたと云ひ得るであらう。彼に於て道德は歴史的社會の客觀的精神に存するものであつて、絶對的否定性としての人格的共同社會に存するものではなかつた。彼の道德は『絶對精神』を缺く。かゝる道德は前に述べた如く本來過去のなる客觀的精神の本性に従つて他律的なる保守的の道德に陥る。之は眞實の自律的なる道德の否定に外ならない。道德は最も根源的なる人格共同の生命の根本様式であつて生命の歴史的社會的なる表現形態に盡きるものではない。況や道德は客觀的非實在的なる觀念形態ではない。かゝるものの歴史の過程

に於ける建設と批判と再建の遂行をなすものが道德に外ならぬのである。之が歴史にあつて同時に超歴史のものである。『絶対精神』とはかゝるものでなければならぬ。ヘーゲルは道德の媒介性を強調するの餘りカントの當爲の直接性を棄て去つたものと云はなければならぬ。當爲の單なる直接性の立場は非歴史性の立場に過ぎない。この意味でカントに未だ眞實の道德説はない。同時に客觀的精神の立場は單なる歴史性の立場に過ぎない。この意味でヘーゲルにも未だ眞實の道德説はない。眞實の道德は根源的に人格共同社會的のものであつて表現的なると同時に超表現的なるものなのである。

私はこゝに初めて『辨證法的なるもの』に移り得る場所に到達した如く思ふ。今簡單に筋道をのべた客觀的精神の構造を嚴密に明かにする事によつて辨證法的と共に表現的の構造並びにその聯關を明かになし得るであらう。私は辨證法的構造のものとして初めてヘーゲルによつて唱へられ、近くは表現的構造のものとしてデイルタイより新に問題とされ、ジムメルに於て特殊な姿に發展したこの『客觀的精神』なるものの眞實の構造を明かにすることによつて、我々のとるべき立場が自ら明かになつて來ると思ふ。(未完)